



8-細胞期を経て16個に達し、桑実胚 (morula) と呼名は変わる。然し、個々の細胞分化の方向性は未だに定まらぬ。ヒトは己自身の如何なる部分から創り始めるか、意の儘になる訳ではない。中枢神経系か、将又、活発な運動を可能にする骨格や筋肉など、運動器系か。

接合子は雄性と雌性の配偶子、即ち精子と卵子が接合 (conjugation) して誕生した歴としたヒトの細胞で染色体数は倍数体 (diploid)。現金なもので、半数体 (haploid) の時分にはconvoy宛らに壁を巡らせて卵を囲んでいた顆粒膜 (放線冠) 細胞、接合が成立するや、受精卵から離れ去って逝く。嘗ては、胎生3週目頃に卵黄囊の壁に生じた胚細胞 (primordial germ cell)、母親の正中線上を彷徨い乍も遊走して到達した生殖隆起、透かさずこれに寄添う前顆粒膜細胞 (pre-granulosa cell)。栄養補給やhaploid卵の庇護を担う。

唯、闇雲に増殖するだけの桑実胚の割球が目標を定めた分化を示すのは外側に栄養胚細胞 (trophoblast) を分離してから。何しろ卵黄を持たないyolk-less eggから発した細胞。腰弁当も無き儘に東海道を旅鳥、何処の峠の渡り鳥。

細胞は機能別に分化し始めるが、栄養分の獲得こそがヒトの栄養胚細胞に先ず求められる機能、即ち切取強盗。

お かいこぐるみ 「御蚕包」

名誉院長 西 田 敬

「御蚕包で生れ、蝶よ花よと育てられ」ええトコの子を前にして、生まれの良さを揶揄する、聊か僻みっぽい戯言。卵にミルクを呑ませて遣る馬鹿が何処に居るか？夫が…居るのである。何でも実証して見せてくれる、あの驚嘆する可き医学者Otto Warburgが1908年に観察した事実、海胆の受精卵の酸素消費量は非妊時の6倍にも跳ね上がる。海胆の卵と雖も、接合子とも為ればエネルギー代謝の量は微々たる霞ではない。確かに、卵と雖も栄養を要求している。一個の細胞が増殖して恰も建造物を組立てるように、人体を建ち上げる。入組んだ行程は混入って居て、難解、そして、何より興味深い。接合子と呼ばれる受精卵は忽ち分裂を開始、2個の割球 (blastomere) と為る。その後、4-細胞期、

